

「アーカイブをアーカイブする」制作後記

私がアーカイブする現場に招かれ、それを記録する過程にあたり、もっとも興味深かったことは、アーカイブ化された記録対象、アーカイブ化するための収集基準、アーカイブ化する作業者の手つき、アーカイブ化に関する諸々、それらを観察し技術（機械）的に記録することによって、それらが“確かな権限の下に管理されていること”の輪郭が、“アーカイブしている”という人間らしい表面的な様子よりも、強く現出してくるという事態だった。

無邪気にアーカイブを取り巻くパワーの現出に驚くが、そもそもアーカイブの語源に“始まり・第一の権威-支配”をはらんでいることを知れば、その事態は当然のことであったのかもしれない。だけでも語源的な意味は、現在の「アーカイブ」の意味とは区別して考えることが懸命だろう。

(※「アーカイブ」は、継続的に蓄積されたドキュメント、アーカイブが保存される建物、制度としてアーカイブを管理する機関などを指している。)

一万円札という印刷物をみると、一万円の“価値”が確か過ぎるイメージとして実態なく現れては、人のふるまいを決定づけていることに不思議に思うことがあるが、アーカイブ化の現場では、人と人の中で発生する実態のない権限が確かさなパワーとなって現れて人を支配しアーカイブに影響を返している様子も、非常に奇妙に感じられる。

では管理の外縁に配置された、機械を手にし技術をもつ私本人は？

--- まばたきする。

その瞬間に気づかざるを得ないことは、私本人こそが、属性が異なるだけで、やはり同種のパワーを有しているということ。権限の輪郭をなぞり発見できるのは、力と力の利と利の関係性においてであるからだ。私のもつパワーもまた技術によるものだが、それは科学者、歴史家、記録者としてもではなく、芸術家として扱われる技術であり、そしてこの技術は人間の命の欲動を起源としている。創造、想像することは、命以外には不可能だ。芸術-技術-アーカイブそして命、これらは全て無関係ではないことに気づいて、またそれに奇妙さを覚える。

本作品群の表現の目的は、“目に見える”という手掛かりを始まりとして、実態のない確か過ぎる名のないイメージを現出させることにある。

そしてそのイメージで加減なしに遊ぶことである。

齋生田兵吾

『歴史学に、アーカイヴが先立つ。物理学的発見に実験（観測）装置が先立つ。』

そして人類の歴史に、技術が先立つ。技術の本質には歴史を複製するアーカイヴが、アーカイヴの本質には歴史を複製する技術がある。

いつも、歴史はアーカイヴ=技術に先行され、転移し、隠されている。

歴史の一回性はつねに一すでに奪われている。複製可能なものだけが、複製される。

アーカイヴ=技術が漏らしてしまった出来事は、歴史に満たない《例外》として、闇に葬られてしまう。それは文字通り黙殺するほかない事故なのだ。』